

中部の

エネルギーを 築いた

人々

「電気報国」の生涯、矢作川水力副社長 杉山 栄

矢作水力は、矢作川上流部の水力開発(6地点、2万1000kW)を目的に大正8年3月、福沢桃介系の資本で創設(資本500万円、社長：井上角五郎)された。昭和6年11月に天竜川筋で開発を行う天竜川電力を合併し、昭和8年2月には北陸方面で水力開発を行う白山水力電気を合併し、5大電力に次ぐ規模の会社へと発展をとげた。杉山栄は同社の設立以前から関わり、設立後は経営の中心として活躍し、同社の生みの親・育ての親であった。



杉山 栄

杉山栄の略歴

杉山栄は明治14年3月、岐阜県稲葉郡加納町(現岐阜市)に生まれ、明治38年東京帝大工科大土木学科を卒業した。翌年箱根水力電気の土木課長となったが、明治44年3月、逓信省臨時発電水力調査局名古屋支局主任技師に転じ、中部各地の水力地点を踏査した。大正2年同局の廃止に伴い退官、招かれて名古屋電灯に転じ、大正7年木曾電気製鉄設立と

もに移籍し土木課長となった。さらに大正8年3月矢作水力株式会社が創設されると専務取締役役に就任、昭和3年には副社長となった。また、矢作水力関連会社である、矢作索道・矢作開墾の社長、矢作工業・矢作製鉄の取締役役に就任したほか、大同電力や三信鉄道の取締役として活躍した。

矢作水力との関わり

杉山と矢作水力との関わりは、臨時発電水力調査局の時代、大正企業組合(矢作水力の前身)から矢作川筋の水力開発について意見を求められ、囑託技師となったことに始まる。大正3年1月、同社発起人の1人となって、地元交渉にあたり、同年地元稲橋・武節村との間に仮契約が締結された。しかしその後道

路問題や地元への電力供給問題で交渉が難航し、大正7年2月に地元との合意にこぎつけたのは専ら杉山の努力であった。このように、杉山は臨時発電水力調査局時代現地を踏査し、地元交渉の中心となり、設立後は専務取締役・副社長となり、創業期の困難を切り開き経営を軌道に乗せた。

杉山の功績

杉山は、「電気報国」をモットーとし、生涯を水力開発に捧げ、矢作川、天竜川などに32地点、50万kWの建設に関わった。彼の事業活動を振り返ると次の3点が特記される。

第1は泰阜発電所の建設である。矢作水力では、天竜川中流部(長野県下伊那郡泰阜村)に高堰堤式の出力52,500kWの泰阜発電所の建設を進めたが、杉山は建設部長として献身的な努力を傾け、地域住民の強い反対を説得して工事を完成させた。



「発電所記功碑」(奥)「福沢桃介先生寿像」(手前)
「福沢桃介寿像之由来」(中央)



泰阜発電所(当時)



黒田ダム(当時)

第2は黒田ダムの建設である。杉山は「わが国の宝は雨」と語り、河川の上流に貯水池を設け、渇水時に火力用石炭の消費節約を図ることを提唱し、昭和9年5月、名倉川支流黒田川上流に周囲8^{キロメートル}の黒田貯水池を建設、これにより下流の発電所で年間発電量1000万kWhを増加させた。(同ダムは昭和55年9月10.2^{メートル}嵩上げされて、奥矢作発電所のダムとなっている。)また、和知野川の岩倉貯水池や木曾川の三浦貯水池も彼の提唱で建設された。

第3は、晩年の事業として進められた電気化学工業で、余剰電力を活用して硫酸アンモニア、合成酢酸等を製造する矢作工業(現東亜合成)を設立し、杉山は取締役兼取締役に就任した。

杉山は、識見卓抜、人格高潔で名聞を求めなかったが、昭和13年10月、57歳で没した。

(浅野伸一)